

平成二十四年度 冬季大会印象記

自意識の二つの型とモダニズムの帰趨

郷内誠「瀨山の話」から「城のある町にて」へ
 一初発期の梶井基次郎とモダニズム一

山崎義光

従来「瀨山の話」は、梶井のもっともよく知られた作品「檸檬」の成立過程における通過点として位置づけられ、論じられてきたという。それに対して、本発表は、モダニズムとの関連から「瀨山の話」を読み解こうとした。「瀨山の話」の細部をよく読めば、他者に見られる自己の意識が綿密に描き出されていることに気づく。「顔面」の変化から「心」を読もうとし、また顔面の変化に対する周囲の反応に注意が向けられる。そのような観点から、他人に見られる自分（「第二の自己」）に突き動かされる瀨山が語られている。あるいは、日常身の回りのモノのうちに、「音楽的効果」や「道具類の配置のハーモニー」を感じ、「興奮」「陶醉」する都市消費生活者の意識が語られる。想像的な他者の視線の前につくられる表層的な「第二の自己」、都市消費者の陶醉感覚が語られることによって、瀨山という形象には、モダニズムの時代の自意識のありようが描出されていると指摘する。

破滅的でありながら、止まることのない「陶醉」に突き動かされる彼は、「放縦―破縦―後悔の循環小數」を繰り返さず姿として形象化される。それは、表層的なモノの向こうに想像的な他者の意識を感じ、それに憑かれ突き動かされ、自分が「演戲」をしているのか「本気」なのかの区別がつかなくなる自意識のありようなのだ読み解いてみせた。

それは、「城のある町にて」のなかで、城から眺める峻が、「何処を取り立てて特別心を惹くやうなところ」もないその風景に、しかし「それでゐて姿に心が惹かれ」「なにかある。本当になにかがそこにある」と感じると対照的であると指摘する。この差異は、「イロニイ」と「ユーモ

ア」の差異であるという。

自意識のありようとしての「イロニイ」とは、「窮屈な客観性」のうちに客体化されることを拒み、「限らない可能性」を留保して、「内的な独創的自由を保持」しようとする意識である（カール・シュミット「政治的口マン主義」）。それに対して、「ユーモア」とは、「対象の巨大さと自己の無力を認め」ながらも、そういう無力な自我を、大人が子どもを見るように笑いとはして受け容れる自意識のありようである（フロイト「ユーモア」、柄谷行人「崇高とユーモア」）。

およそ、そのような差異として理解すれば、瀨山の自意識は「イロニイ」として、峻の自意識は「ユーモア」として理解できる。このような差異は、両テクストにおける語り手の位相の違いからも理解できるといふ。

「瀨山の話」では、神（超自我）のような語り手「私」の位置から瀨山（自我）が語られる。しかし、瀨山はその語り手からは語り尽くせない過剰な可能性をもった存在として語り残される。「城のある町にて」は、物語世界外に位置する語り手によって三人称で物語られる。局外の語り手（超自我）は、「画」のような町並み、入り江、秋らしい青空、白い雲といった「パノラマ」的な、格別どうということもない城からの風景に、「謎を隠し」た「なにか」を感じてたはずむ峻（自我）の意識を、いわば大人が子どもを見るように描出しているというわけである。

郷内氏は、このような「瀨山の話」から「城のある町にて」への展開に、「イロニイ」から「ユーモア」への主題の転換」を見ることができ、それこそが「初発期の梶井における達成」であると評価した。

発表は、細部への目配りが行き届いた読解にもとづくもので、丁寧かつ説得力をもって論じられていた。両テクストの特質を、「イロニイ」と「ユーモア」の差異によって把握したことも論理的によく理解しうる。その点、質の高い発表だった。

発表に対して、会場から最初に二つの質問がだされた。一つは、都市モダニズムと今回の発表はどう関連しているのか。もう一つは、「瀨山の話」と「城のある町にて」の違いは「達成」として評価してよいのか。これらの質問に対して、答えにくそう、緊張もあったせいであろう、明解には応じられていなかった。

本発表では、モダニズムは、想像的な他者の視線を介して落ちつきなく可能性を留保し続けようとする自意識のありようとして現れていると理解されていたろう。そして、二つ目の質問に対する答えの方に、より大きな課題が伏在していたのではなかったかと思う。

そもそも「瀬山の話」と「城のある町にて」は、舞台となる場所が異なる。おおよっぱに对照すれば、前者は、近代的な群衆都市のような場所に他所からやってきた孤独な自意識として設定されている。後者は、古くからの生活の堆積が感受されるような落ち着きのある「城のある町」を舞台とし、風景画のような自然を前にした自意識だった。しかも、彼をとりまくのは姉夫婦とその娘勝子など家族たちである。勝子に対する峻のまなざしは、大人の子どもに対するまなざしであろう。立場を代えた「ユーモア」の反復を見ることが出来る。

モダニズムの帰趨はさまざまに論じられる。それまでの時代との切斷、機械化と疎外、人・物・生きものの平準化、新しい表現様式の実験、都市消費者の多形的な自意識の発現など、切り口はさまざまでありうる。そして、モダニズムが一九三〇年代に入る頃から、すなわち満洲事変以後、日中戦争、太平洋戦争へと向かう中で、日本回帰、伝統主義、故郷意識、地方主義といった文化的、国家的な自意識（アイデンティティ）問題へと近接、転換（転向）することもまたモダニズムの主要な論題の一つである。

そういう目で見ると、果たして「瀬山の話」から「城のある町にて」への展開は「達成」だと簡単に言っているのだろうかというのが、質問者の疑念だったのではなかったか。というよりも、私の疑問でもあった。「城のある町にて」と「瀬山の話」との違いを、もう少し別の観点からも比較してみることを求めたい気がした。そして、どのような論脈において評価するか、「達成」という評価が何を意味しているかについて、立ち止まって考えてみる価値があるように思った。

塩谷昌弘「外岡秀俊『北帰行』論

—私・啄木・故郷—

松本博明

塩谷氏の発表は、文藝賞を受賞した外岡秀俊の処女作『北帰行』について、賞の選考委員であった江藤淳をはじめとする先行研究者の本作品に対する評価を前提としながら、本小説が様々な場面で抱えている「分裂」が、逆に小説の自己相対化を図る上で重要な機能を果たしているという点を視座に、その機能を解きほぐしていこうとするものであった。

小説の冒頭部、啄木ゆかりの地を巡りながら啄木の文学、人生、人物についての批評が様々に披歴される極めて評論的な内容と手記として回想される叙情的な部分が現れる分裂したテキストのあり方は、啄木そのものの分裂、すなわち叙情詩人としてのそれとプロレタリア文学の先駆者という啄木の持つ二つの像、さらには歌と批評、言葉と行為、抒情と政治といった相対的要素を横糸にし、その啄木の分裂を統合するものとしての主人公の旅を語る、つまり小説の語り手の語り手の位相、文体の分裂を縦糸にして織りあげられていったテキストであるとすると。

語り手によってしばしば繰り返される啄木に対する自己陶醉型の独白は、むしろ小説の外縁を意識する語り手による「アイロニー」の表出であり、「雲は天才である」に見られる「構想と文体の不一致」をそのまま『北帰行』の主人公の設定に置き換えること、さらには主人公を戯画化することによって語り手が自己陶醉から免れる、というアクロバティックな手法によって練られていることを指摘する。

本作品がテキストとしてとてもアクロバティックなものであることは、先行研究者の言説からもうかがえるのだが、その最初の評価者である江藤の研究者でもある発表者が、そこからあらためて『北帰行』が語る啄木をさらに語るといふ、結構曲芸的でありながら実は正統的な構造分析であるというこの「分裂」がなかなか愉快であった。